

## 郭家住宅の重要文化財（建造物）指定に係る資料

- 1 名称：郭家住宅 10棟  
洋館、診察棟、座敷、離れ、米蔵、東土蔵、南土蔵、風呂、外便所、  
表門及び石塀、土地

2 所在地：和歌山県和歌山市今福

3 所有者：個人

### 4 概要

郭家住宅は、和歌山市今福に所在する住宅で、かつて「郭医院」として営まれた擬洋風建築<sup>1</sup>である洋館を始めとした建造物群<sup>2</sup>である。広い屋敷には江戸時代末期から大正時代にかけて建設された建造物が残されている。

郭家は清朝の侍医であったが、国乱を逃れて長崎に居住し医業に従事したとされる。三代目の代で和歌山に移り同じく医業に就き、四代目より紀州藩の藩医となり以降代々藩医を務めた。七代目郭百輔<sup>ひゃくすけ</sup>は西洋医学を学び、明治時代になると、明治7年（1874）には和歌山県より和歌山医学校兼小病院の設立議員に任命され病院の建設に尽力した。そして同じ頃百輔は民間医院として、明治10年（1877）にこの郭医院を開業した。以降八代目郭嘉四郎<sup>かしろう</sup>が昭和3年（1928）に没するまで、当住宅において医業が営まれた。

郭家住宅洋館は木造二階建、瓦葺で、建設時の文書より明治10年に建設されたことが明らかである。正面に玄関ポーチと二階にベランダを備えた、洋風建築らしい特徴ある外観である。一階は二室よりなり、待合や薬局、応接に使用された。二階は一室で、正面側にベランダを設ける。洋館の開き戸にはペンキで木目を描いた木目塗りの痕跡が残っており、明治前期の擬洋風建築らしい特徴を見せる。

診察棟は、木造平屋建、瓦葺で、洋館の西側に接続する。洋館と同じ明治10年の建設と考えられる。洋館とは一変して完全な和風建築で、二室の続き間座敷が東西に並び、東が診察室、西が内診室であった。

座敷は木造平屋建、瓦葺で、診察棟の北西に接続して建つ数寄屋<sup>すきや</sup><sup>3</sup>の座敷である。座敷の建築年代は襖の絵師の年代観より天保年間（1830－1844）と推定される。明治14年（1881）に郭家に移築されたことが文書より判明する。なお、陸奥宗光の生家である伊達家から移築したものと伝えるが文書では確認出来ない。南北に二室を並べ、網代天井や凝った組子の障子を用いた濃厚な茶席の意匠に満ちた建物で、北西には茶室を備え、見応えのある数寄屋空間を有している。

離れは木造二階建、瓦葺で、西側の廊下で座敷に繋がる。建設年は文書資料より明治24年（1891）である。一階二階ともに、一室よりなる小規模な座敷である。

この他、屋敷には米蔵、東土蔵、南土蔵といった、米や家財を収納する蔵が建ち、他には風呂や外便所が建つ。屋敷正面にはセメント造に青石を貼り付けた表門及び石塀が建ち、屋敷構えを整えている。

郭家住宅洋館は、文明開花期でまだ珍しかった洋風建築に挑んだ当時の建築職人たちの技量がいかに発揮されており、その完成度が高い。また座敷の茶席趣味にあふれた数寄屋意匠も見応えがある。これらの建築は、医師であり文化人であった郭百輔の意向や趣味が反映されたもので、近代和歌山に営まれた民間医院の建造物として貴重である。特に洋館の建設年代は、全国に現存する擬洋風建築の中でも古いグループに入るとともに、文書により建設時の様相が判明することも文化財としての価値を高めている。

---

<sup>1</sup> 明治時代初期の洋風建築で、江戸時代から続く日本の建設技術を元に造りあげたもの。本式の西洋建築ではないという意で「擬」が冠されるが、近年では当時の職人たちの創造力や工夫が表れた建築として評価が高まっている。

<sup>2</sup> 平成9年に「郭家住宅（旧郭百甫医院）洋館、診察棟、主屋、離れ、土蔵、石塀、外便所」として、登録有形文化財（建造物）に登録されている。

<sup>3</sup> 茶室建築などに代表されるもので、格式や様式を重んじるよりは、皮を残したままの柱を使用したり、竹や杉皮を天井や壁に用いるなど、茶人や文化人の趣味が現れた建築。



1. 郭家住宅を街路より見る 中央が洋館、右に東土蔵



2. 郭家住宅洋館 1階内部



3. 郭家住宅洋館 2階ベランダ



4. 郭家住宅座敷 九畳の間